

おばあちゃん、いっしょに行こう

山下君と二人で学校から急いで帰っていたときのことです。信号をすぎた所で、こしが曲がったおばあちゃんに、

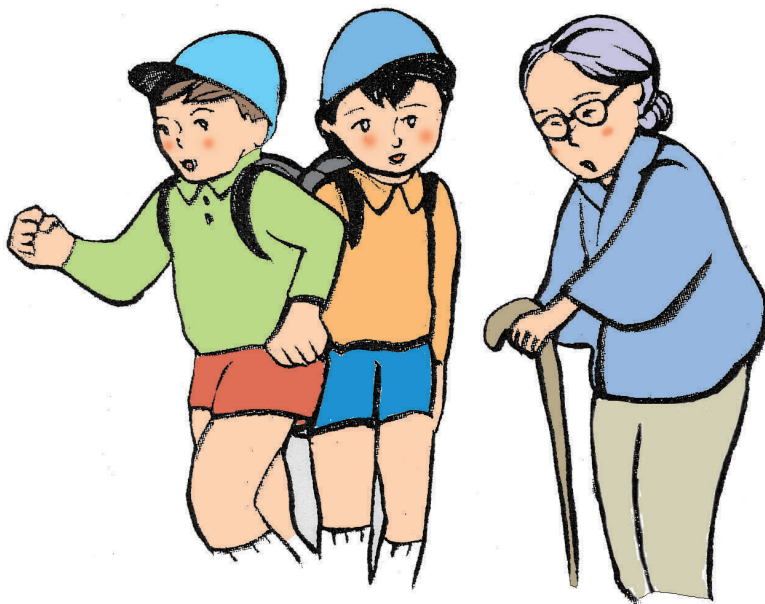
「ゆう便局は、どの辺にあるん。」

とたずねられました。そのおばあちゃんは、声がひどくかれ、少しよろよろしてつえをついていました。口で説明しただけでは分かりにくいだろうなあと思いました。早く帰って遊びに行きたかったけれど、……。

すぐに考え直し、思いきって、

「おばあちゃん、いっしょに行こう。」

と答えました。





山下君もついて来てくれました。二人でおばあちゃんの足に合わせて、ゆっくりゆつくり歩きました。

（この調子ちゆうしだとなかなか着つかないなあ。やつぱり、口で教えた方がよかったかなあ。）と思い、少し後ごうかいもしてきました。

とちゆうで、山下君くんが、

「ぼく、家に帰ってくる。」

と言って帰ってしまいました。

おばあちゃんと二人だけになりました。

二人だと話すこともなく、急きゆうにしいんとしれました。ぼくは、

「だいじょうぶですか。」

と話しかけるのがせいっぱいでした。そのたびにおばあちゃんにはっこりしますが、

返事は返ってきませんでした。

(もしかすると、耳が悪いのかなあ。)
と思いました。

チリン、チリン。急に後ろからベルの音が鳴りました。山下君が自転車で追いかけて来たのです。ちよつと心強くなり、また、三人でゆう便局へと向かいました。いつもならすぐ着くゆう便局も、このときはすごく遠くに感じられました。

やっと、ゆう便局の前まで来ました。

「ここがゆう便局ですよ。」
と言うと、おばあちゃんは顔を上げ、

「ありがとう。」





と言って何度もおじぎをしました。あまり話
はできなかつたけど、この一言はすごくうれ
しかったです。おばあちゃんの顔には、おば
あちゃんの心があふれていました。

遊びに行くのは少しおくれたけど、ぼくた
ちは、すごくさわやかな気持ちになりました。